

スポーツ試合場面の心理学的研究

辻 本 勇

I 緒 言

スポーツの試合場面は、各種の体育的活動のなかでも最も強くパーソナリティ形成に寄与するものの一つと思われる。即ち、Allport が「パーソナリティとは、精神物理的組織をもつ個体的の力動的体制であって、環境に対する独自の適応を決定するものである」というように、性格を単に個体内の精神機能の傾向性である以上に、社会的場面の規定をもつものであるとするならば、スポーツの試合場面は、自己と相手に対極として、競争意識、情緒的緊張がたかまり、自己と環境—社会的場面が、ゲームとして最高度の緊張体系 (Spannung) を示し、いわば危機場面、葛藤場面としての特殊な心理学的構造を有するものといえよう。

さて、従来この試合場面のもつ教育的意義については、殆ど全面的に肯定されているようであるが、特に団体競技の試合は、場の圧力がきわめて強く、パーソナリティ形成、人間関係などの点に幾多の危険な事態を含み、種々研究すべき問題がひそんでいるように思われる。

本研究は、バレーボールの試合場面をとりあげ、まず試合そのものが全体として選手達にどのように受け取られているかという試合についてのプラス・マイナスの価値判断の調査を行い、次にこの試合場면을構成する諸要素のウェイトを、「試合の感じが良かった場合」と「悪い場合」とのそれぞれについて明らかにし、かくて試合構成要素の中で最も主要な位置を占める相手チーム、及び審判の二つについて「試合の感じが良かった場合」と「悪い場合」の理由を調査し、危機場面としての試合場面の快、不快の情緒反応の分析をこころみ、更にこれを男女別、上中下位のランキング別に比較研究し、その特殊構造の一端を明らかにせんとしたものである。

Ⅱ 調査方法・対象・時期

- (1) 調査方法 質問紙調査法（Questionnaire）により、無記名とした。
調査項目の設定に当っては、数次の予備調査の結果決定した。
- (2) 調査対象 奈良県下全高校バレーボール選手、男子20校225名、女子25校317名。他に特殊研究項目についての比較対象として同野球部選手16校163名。
- (3) 調査時期 昭和34年9月～昭和35年10月。

Ⅲ 結果及び考察

1. 試合の価値判断について

調査第一は、試合が選手達に如何に受け取られているかをみようとしたものであり、試合をした結果、それが自分たちにとってマイナスと思われるものと、プラスと思われるもののそれぞれについて、5項目の中から一つを選ばせたものである。

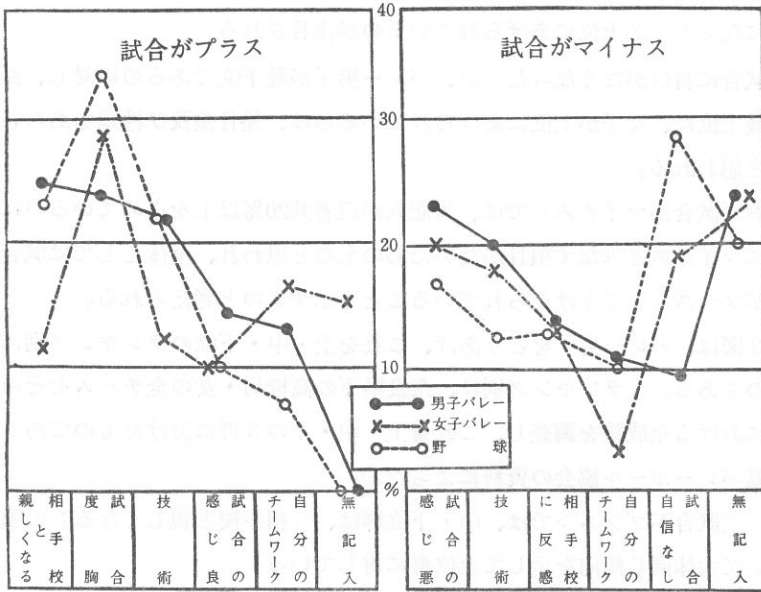
第1図は、これをバレー男子・女子・野球についての比較を示したものである。

(1) <試合がプラス>の方では、バレー男子、野球がほぼ同じ傾向を示し、「試合度胸がつく」、「相手校と親しくなる」、「技術の上でプラスになった」などに強い反応を示しているのに反し、バレー女子は「試合度胸がつく」の他は分散的であり、「自分のチームワークがよくなる」、「技術の上でプラス」などがあげられている。

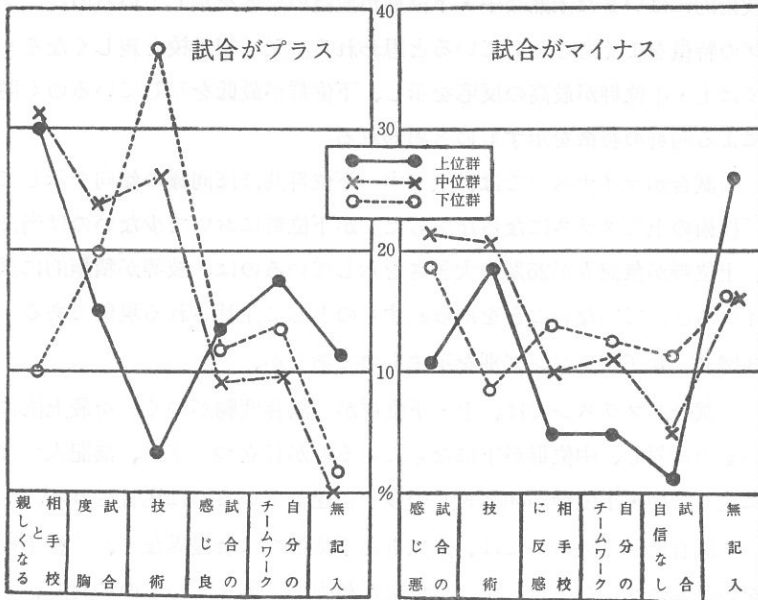
即ち、男子ではバレー、野球とも同じ傾向を示すのに反し、女子とでは「相手校と親しくなる」、「技術の上でプラス」の項目において明らかな性差がみられる。

(2) <試合がマイナス>の方では、「試合に自信がない」の項目を除きバレー

第1図 バレー男女野球別のプラス・マイナスについて



第2図 バレー男子ランキング別「試合のプラス・マイナスについて」



一男女、野球ともほぼ同じ傾向を示し、「試合の感じが悪くて試合をすることが嫌になった」が上位にあげられているのが注目される。

「試合に自信がなくなった」が、バレー男子が最下位であるのに対し、野球では最上位に、女子が上位にあげられているのは、種目差及び性差をあらわすものと思われる。

なお「試合がマイナス」では、無記入が三者共20%以上を占めているのは、特別にマイナスとみなす項目がないためのものと思われ、全体としては試合の結果がプラスとしてうけとられていることを示すものと考えられる。

第2図は、バレー男子をとりあげ、これを上・中・下位のランキング別にしたものである。（ランキング別は、奈良県下の高校男・女の全チームをその年度内における全成績を調査し、これを上・中・下の3群に分けたものであり、奈良県バレーボール協会の資料によった。）

(1) <試合がプラス>では、中・下位群は、「相手校と親しくなる」の項目を除いて大体同じ傾向を示して上位群に対しての。

即ち「技術の上で大きなプラスになった」が、上位群が最低であるのに対し、技術的にはいまだ未熟な中・下位群が最高の反応を示しているのは、ランキングの特徴をよくあらわしていると思われる。又「相手校と親しくなる」の項目では上・中位群が最高の反応を示し、下位群が最低を示しているのも同じ理由による両群の特徴を示すものと思われる。

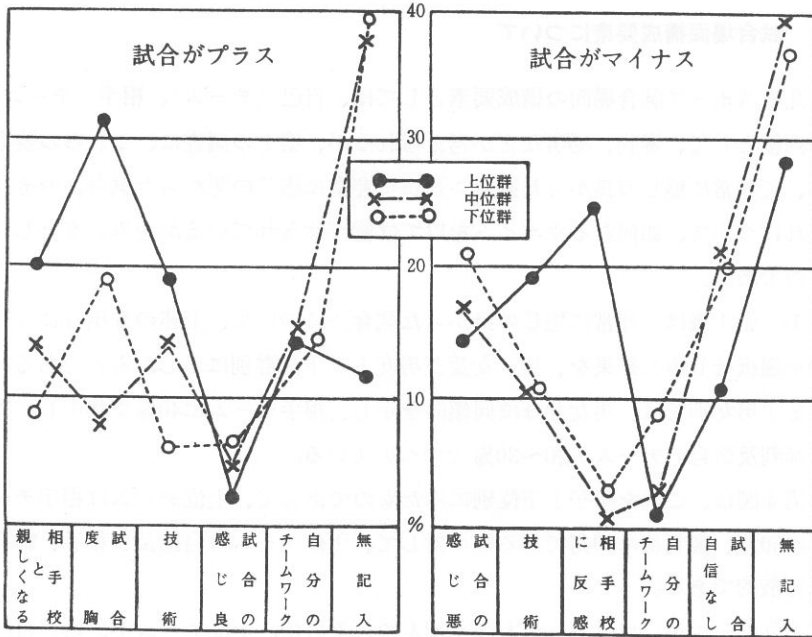
(2) <試合がマイナス>では、上・中・下位群共ほぼ同様の傾向を示している。「技術の上でプラスにならなかった」が下位群において少ないのは当然であり、上位群が無記入が26%の大きさを示しているのは、彼等が積極的に試合をマイナスとみていないことをあらわすものとして注目される現象である。

第3図は、女子ランキング別を示すものであるが、

(1) <試合がプラス>では、上・下位群が「試合度胸がつく」を最上位に選んでいるのに対し、中位群が下になっているのが目立つ。また、無記入では上位群に比して中・下位群が40%近くの多きに達しているのは注目される。

(2) <試合がマイナス>では、上位群と下位群では余程異なり、「相手校に反感をいだくようになった」を、上位群が最上位に選んでいるのに対し、中・

第3図 バレー女子ランキング別「試合のプラス・マイナス」について



下位群は最低を示している。又「試合に自信がなくなった」が中・下位群に高く、上位群が低いのも両ランキングの特徴を示しているものと思われる。

総括すれば、＜試合がプラスになった＞と思われるものとして、「試合度胸ができた」とする心的態度、及び「相手チームと親しくなった」の人間関係、並びに「技術の上でプラスになった」の技術に関する3つの項目が目立ち、＜試合がマイナス＞の面では「試合の感じが悪くて試合をすることが嫌になった」、「相手校に反感をもつようになった」、「試合に自信がなくなった」などの感情や心的態度などがあげられ、且つ上・中・下位のランキング別では技術的な優劣に原因する差が認められ、男女性差も若干うかがえるようである。

結論的にみて、試合がプラスとしてうけとられている傾向はうかがえるが、試合の選手達にあたえる影響は単にプラスの面のみならず、マイナスの面でも種々の影響にあたえていることが明らかであり、試合場面が教育的見地からみて危機場面であることを如実にものがたるものである。以上比較した項目につ

いては差の検定を行い危険率1%～3%で有意性が認められた。

2. 試合場面構成要素について

凡そスポーツ試合場面の構成要素としては、自己(チーム)、相手(チーム)を両極として、審判、場所などが考えられるが、第2の調査は、これらの要素が、＜非常に感じの良かった試合＞及び＜非常に感じの悪かった試合＞のそれぞれについて、如何なるウェイトを以て位置づけられているかをみようとしたものである。

(1) 第1表は＜非常に感じの良かった試合＞について、上述の5項目より一つを選択せしめた結果を、男・女及び男女上・下位群別に示したものである。

まず男女別では、男女共ほぼ同傾向を示し、相手チームに40%で集中し、次に審判及び自己チームが20～30%でつづいている。

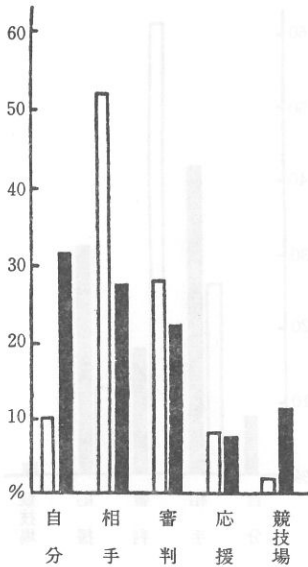
第4図は、これを男子上下位別にみたものであって、上位チームは相手チームに50%、審判員に30%であるのに対して、下位チームは自己及び相手、審判に分散的である。

下位チームが、自己チームを多く選んでいるのは、上位チームが、殆ど自己集団を問題にしていないのに比して、下位チームの特性を示しているものと思われる。

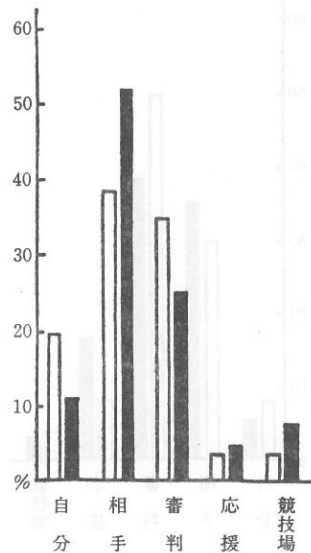
第1表 非常に感じの良かった試合について

| | 男子選手 | | 女子選手 | | 男子上位 チーム選手 | | 男子下位 チーム選手 | | 女子上位 チーム選手 | | 女子下位 チーム選手 | |
|----------------------------------|------|------|------|------|---------------|------|---------------|------|---------------|------|---------------|------|
| | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % |
| 自分のチームの監督 や選手の言葉や態度 など良いから | 57 | 25.9 | 71 | 22.4 | 5 | 10.0 | 17 | 31.4 | 11 | 19.5 | 7 | 10.9 |
| 相手チームの監督や 選手の言葉や態度な ど良いから | 92 | 41.9 | 117 | 36.9 | 26 | 52.0 | 15 | 27.8 | 22 | 38.5 | 33 | 51.6 |
| 審判員の審判技術や 態度など良いから | 46 | 20.9 | 97 | 30.6 | 14 | 28.0 | 12 | 22.2 | 20 | 35.0 | 16 | 25.0 |
| 応援団や観衆の言葉 や態度など良いから | 15 | 6.8 | 17 | 5.4 | 4 | 8.0 | 4 | 7.4 | 2 | 3.5 | 3 | 4.7 |
| 競技場の設備や環境 など良いから | 10 | 4.5 | 15 | 4.7 | 1 | 2.0 | 6 | 11.2 | 2 | 3.5 | 5 | 7.8 |
| | 220 | 100 | 317 | 100 | 50 | 100 | 54 | 100 | 57 | 100 | 64 | 100 |

第4図 男子上下位別



第5図 女子上下位別



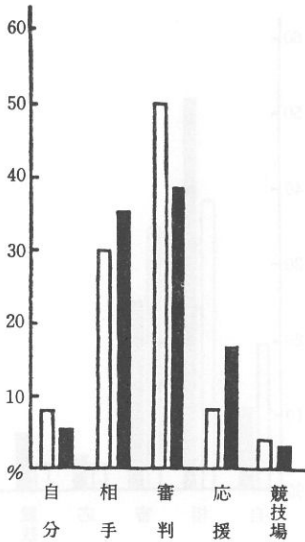
第2表 非常に感じの悪かった試合について

| | 男子選手 | | 女子選手 | | 男子上位 チーム選手 | | 男子下位 チーム選手 | | 女子上位 チーム選手 | | 女子下位 チーム選手 | |
|----------------------------------|------|------|------|------|---------------|------|---------------|------|---------------|------|---------------|------|
| | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % |
| 自分のチームの監督 や選手の言葉や態度 など悪いから | 13 | 5.9 | 30 | 9.5 | 4 | 8.0 | 3 | 5.5 | 0 | 0 | 5 | 7.8 |
| 相手チームの監督や 選手の言葉や態度な ど悪いから | 73 | 33.2 | 112 | 35.3 | 15 | 30.0 | 19 | 35.2 | 15 | 26.3 | 27 | 42.2 |
| 審判技術や態度など 悪いから | 89 | 40.5 | 107 | 33.8 | 25 | 50.0 | 21 | 38.9 | 35 | 61.4 | 11 | 17.2 |
| 応援団や観衆の言葉 や態度など悪いから | 33 | 15.0 | 59 | 18.6 | 4 | 8.0 | 9 | 16.7 | 7 | 12.3 | 20 | 31.2 |
| 競技場の設備や環境 など悪いから | 12 | 5.4 | 9 | 2.8 | 2 | 4.0 | 2 | 3.7 | 0 | 0 | 1 | 1.6 |
| | 220 | 100 | 317 | 100 | 50 | 100 | 54 | 100 | 57 | 100 | 64 | 100 |

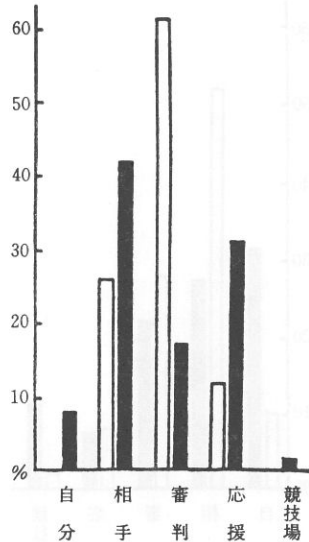
第5図は、女子上・下位群別にみたものであり、ほぼ同じ傾向を示し、相手、審判にかなり多くの反応を示している。

(2) 第2表は、＜非常に感じの悪かった試合＞について、男・女及び男女

第6図 男子上下位別



第7図 女子上下位別



上・下位別に示したものである。

まず男女別では、ほぼ同じ傾向を示し、審判に31～41%、相手チームに31～37%で集中している。

第6図は、男子上下位別にみたものであって、いずれも審判が多く、上位は50%、下位は39%を示し、次に相手チームが30～50%となっている。

第7図は、女子上下位別であって、相手についてはほぼ同じであるが、審判、応援の項目にかなりの差がみられる。このことは、女子下位群が、女子上位チームや男子チームに比較してチーム結成の歴史も浅く、技術的にも未だ初歩的段階であるため審判に対する関心が極めて少なく、逆に応援という外的因子に影響を受け、感情を害しているのではないかと考察される。以上の比較項目には差の検定を行い、危険率1%で有意性が認められた。一般的にみて、男女共上位プレーヤーは下位に比べて審判により多くの関心を示している。

このことは、試合経験が豊かになり、技術が上達し、ルールをマスターするに従って、審判に対する関心が高まっていくことを示すものであり、特に＜感じの悪い試合＞では、審判が非常に大きなウェイトを占めていることは注目す

べきである。

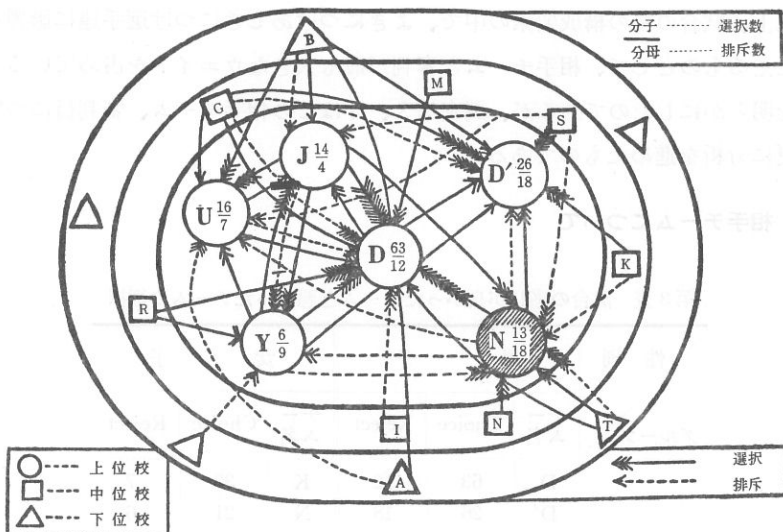
以上、試合の場の構成要素の中で、よきにつけあしきにつけ選手達に影響をあたえるものとして、相手チームと審判が最も大きなウェイトを占めていることを明らかにしたのであるが、調査第3、4はこの相手チーム、審判員について更に分析を進めたものである。

3. 相手チームについて

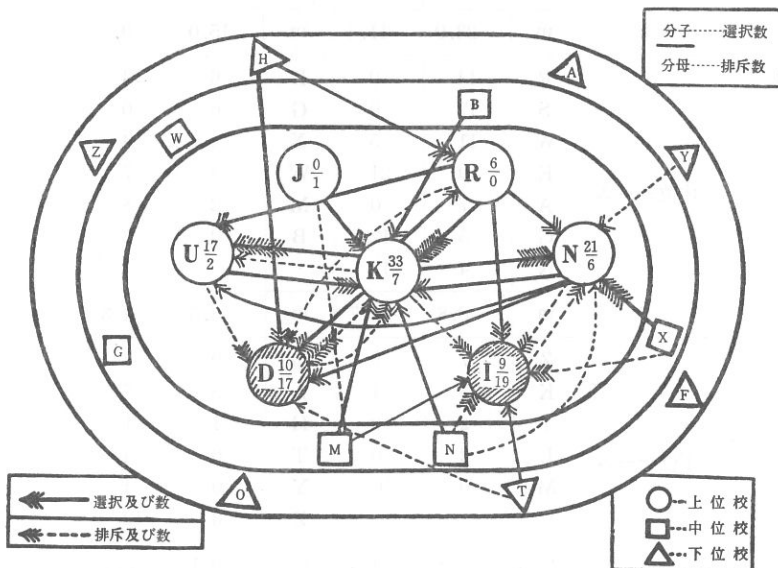
第3表 試合の感じが良かったチームと悪かったチームの選択

| 性 別 グループ | 男 子 | | | 女 子 | | |
|-------------|------|--------|--------|------|--------|--------|
| | チーム名 | Choice | Reject | チーム名 | Choice | Reject |
| 上位チーム | D | 63 | 12 | K | 33 | 7 |
| | D' | 26 | 18 | N | 21 | 6 |
| | U | 16 | 7 | U | 17 | 2 |
| | N' | 13 | 18 | D | 10 | 17 |
| | J | 14 | 4 | I | 9 | 19 |
| | Y | 6 | 9 | J | 0 | 3 |
| | m | 23.0 | 11.3 | m | 15.0 | 9. |
| 中位チーム | R | 14 | 0 | D' | 6 | 4 |
| | S | 12 | 0 | G | 6 | 0 |
| | W | 11 | 5 | X | 4 | 4 |
| | K | 9 | 21 | W | 3 | 7 |
| | A | 7 | 0 | M | 2 | 8 |
| | G | 5 | 12 | B | 0 | 3 |
| | N | 4 | 13 | | | |
| | m | 8.8 | 8.7 | m | 3.5 | 4.3 |
| 下位チーム | Z | 7 | 9 | O | 9 | 3 |
| | K | 3 | 1 | A | 3 | 7 |
| | I | 2 | 2 | H | 1 | 1 |
| | L | 2 | 0 | T | 0 | 4 |
| | M | 0 | 10 | Y | 0 | 4 |
| | | | | Z | 0 | 12 |
| | m | 2.8 | 4.4 | m | 2.1 | 5.1 |

第8図 バレー男子上位群ソシオグラム



第9図 バレー女子上位群ソシオグラム



調査第3の(1)は、＜非常に試合の感じが良かった学校＞と、＜非常に感じが悪くて二度と試合をやりたくない学校＞について、その学校名を記入せしめたものである。

第3表は、この男子、女子、及び上中下位のグループ別の選択と排斥を示したものである。この表によると、選択は男女共上位群に集中し、排斥は分散的である。

第8図は、この調査にもとづいて、バレー男子上位群を中心として、中・下位各チームとの選択、排斥をソシオグラムの表わしたものである。

図の如く(i)上位群の選択、排斥は主として上位群のサークル内に於て行われている。(ii)中下位群は、上位群を選択、排斥しているが、上位群は中下位に対し殆ど無関心を示している。これは、スポーツに於てはよかれあしかれ技術の優秀なものに関心が集中していることを示すものと思われる。(iii)スターD校は県下最強チームであり、選択の中心となっており、N校は第2位であるが、排斥の中心となっている。

第9図は、バレー女子の上位群の選択、排斥図であるが、ほぼ男子と同じ傾向がうかがわれるのは興味深い。

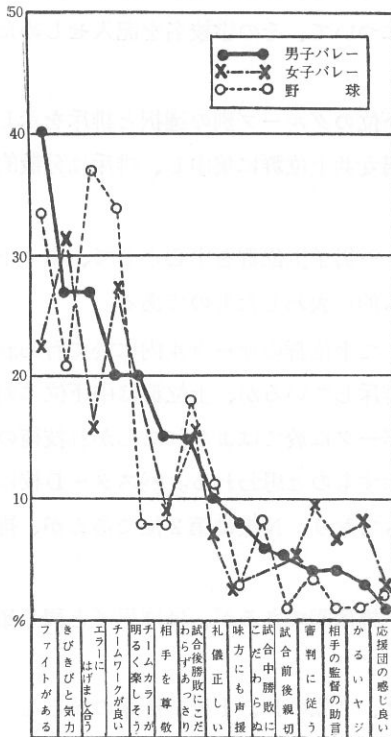
最強チームK校が選択の中心となり、2、3位のD、I校が排斥の核となっている。ここでも男子と同じように選択、排斥が集中的であることが大きな特色をもっており、これには学校に対する伝統的な考え方、相手チームの監督や選手の態度、言動などが大きく影響していると思われるが、この点については、今後体育社会学の重要な問題として研究する予定である。

調査第3の(2)は、この好きなチーム、嫌いなチームとして選んだ理由について調査したものであり、それぞれ15項目の中より2つずつ選ばしたものである。

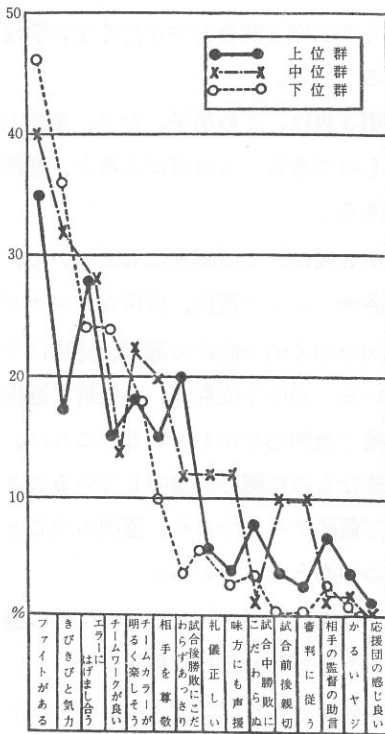
第10図は、バレー男・女、野球別に選択の理由を比較したものであり、大体同じ傾向を示している。

＜感じよかったチーム＞として上位に選ばれているのは、「ファイトがあり最後までがんばる」、「エラーにはげましあう」、「きびきびした気力にみちている」、「チームワークがよい」などの相手の集団自身のモラルに関するもので

第10図 バレー男女野球選択理由



第11図 バレー男子ランキング別選択理由



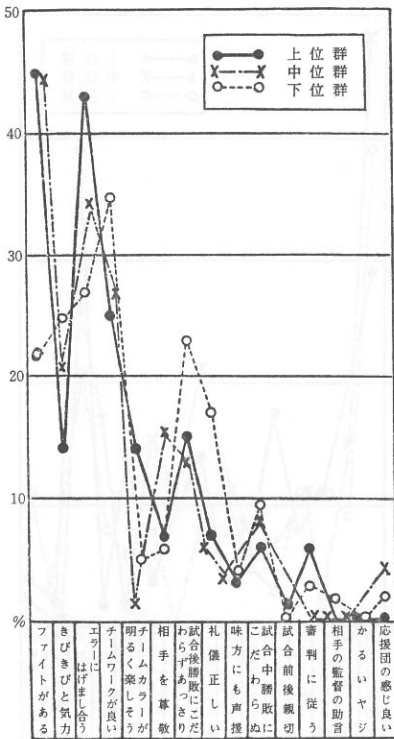
あることは注目すべきである。

なお「ファイト」の項では男女差がみられ、「エラーにはげましあう」の項で、野球が最上位を示しているのは、種目差がうかがわれるものといえよう。反対に、「チームカラーが楽しそう」では野球が低いのも同じく種目差を示すものである。

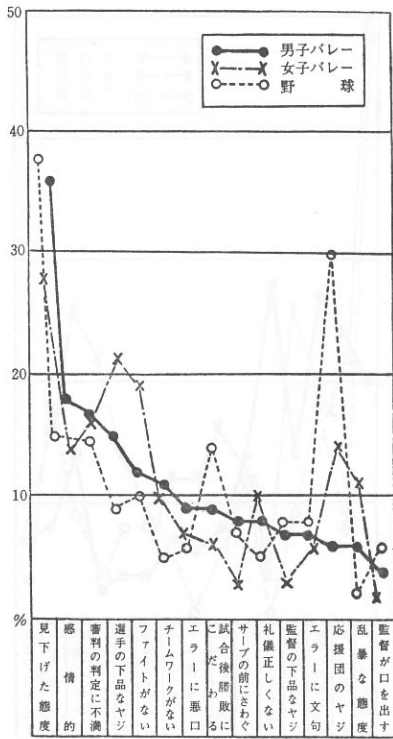
第11図は、バレー男子上中下のランキング別にみたものであり、「きびきびと気力がある」、「勝敗にこだわらず試合がすむとあっさりしている」にランキング差が認められる。

第12図は、バレー女子上中下位のランキング別にみたものであるが、上中位群が「ファイトがある」を最上位に選んでいるのに対し、下位群が「チームワークがよい」を最上位に選んでいる。又「きびきびと気力がある」の項目で

第12図 バレー女子ランキング別選択理由



第13図 バレー、男・女、野球排斥理由



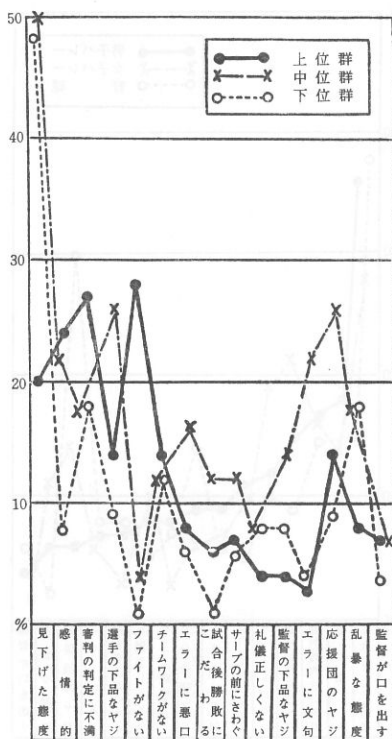
も、男子の場合と同様ランキングの差がみとめられる。

第13図は、排斥の理由を、バレー男女、野球別に示したものである。上位には「相手を見下げる」、「勝敗にこだわって感情をむき出しにする」、「審判の判定に文句を言う」などの集団と外のモラルが選ばれているのは、＜好きなチーム＞の場合が集団内のモラルであるのと対称的である。

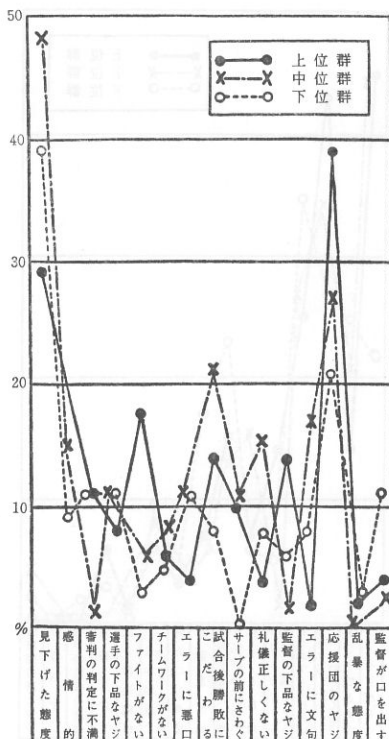
「相手の選手の下品なヤジ」には男女差がうかがわれ、「応援団のヤジがきたないから」には、男女差及び種目差がうかがわれ、野球でのヤジの多さを示している。

第14図は、バレー男子ランキング別を示すものであるが、上位群が「だらしてファイトがない」を最上位に選んでいるのに対して中下位群は極めて低く、逆に中下位群が「相手を見下げた態度をとる」を50%の最上位に選び、下

第14図 バレーランキング別排斥理由



第15図 バレー女子ランキング別排斥理由



位群の20%に対しては、それぞれランキングの特性を示すものとして興味深い。

第15図は、バレー女子ランキング別を示すものであるが、「応援団のヤジがきたないから」、「相手を見下げた態度をとる」などが上位に選ばれている。又「ファイトがない」の項は男子と全く同じで、上位群が高いのに対して中下位群が低く選ばれている。

男・女を通じて、「エラーに文句をいう」の項が、中位に多いのが例外として目立っているが理由は明らかでない。総括的にみて、〈好きなチーム〉、〈嫌いなチーム〉は男女、ランキングともほぼ同じ傾向を示すが、以上比較した項目については、明らかに差があり、差の検定では1%の危険率で有意性が認められた。

4. 審判について

凡そスポーツ審判には主として客観的判断によるものと、主観的判断によるものとの二類型に分けられるが、後者に属するバレーボールに於てはこの審判員の占める位置が非常に高いことは第3の調査によっても明らかにされたわけである。

調査第4は、この重要なウェイトを占める審判員の態度や審判技術を、プレーヤーが如何に受取っているかということを、〈審判員によって非常に感じが良かった試合〉と、〈非常に感じが悪かった試合〉のそれぞれについて10項の中より二つずつ選ばしたもので、第4表は〈感じがよかった審判〉を男・女、及び男女上下位別に表示したものである。

(1) 〈感じが良かった審判〉では、男子は「感情的にならない」、女子では

第4表 審判員によって非常に感じが良かった理由

| | 男子選手 | | 男子上位 チーム選手 | | 男子下位 チーム選手 | | 女子選手 | | 女子上位 チーム選手 | | 女子下位 チーム選手 | |
|--|------|------|---------------|------|---------------|------|------|------|---------------|------|---------------|------|
| | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % |
| 判断が正確で、ミスジャッジがないから | 20 | 4.5 | 7 | 7.4 | 1 | 1.0 | 34 | 5.5 | 8 | 7.3 | 2 | 1.5 |
| 選手、監督や観衆の言動に左右されず、感情的にならないで冷静な審判をするから | 996 | 21.4 | 17 | 17.9 | 20 | 20.0 | 105 | 16.9 | 18 | 16.4 | 27 | 21.4 |
| 副審や線審の意見を聞いて、一人で勝手にきめないから | 59 | 13.1 | 15 | 15.8 | 17 | 17.0 | 54 | 8.7 | 14 | 12.7 | 12 | 9.5 |
| 審判に自信があり、てきぱきと判定をするから | 49 | 10.9 | 8 | 8.4 | 8 | 8.0 | 76 | 12.2 | 14 | 12.7 | 14 | 11.1 |
| コートやネットなどを良く調べたり、又事故の場合には適当な処置をとるなど、試合運営が上手だから | 33 | 7.3 | 10 | 10.5 | 4 | 4.0 | 49 | 7.9 | 5 | 4.5 | 13 | 10.3 |
| 審判の声や動作(サイン・ジェスチャー、吹笛)が、はっきりしているから | 64 | 14.2 | 12 | 12.6 | 17 | 17.0 | 76 | 12.2 | 12 | 10.9 | 14 | 11.1 |
| 試合終了後いろいろ親切に指導してくれたから | 8 | 1.8 | 0 | 0 | 2 | 2.0 | 17 | 2.7 | 2 | 1.8 | 5 | 4.0 |
| どんな場合でも公平な審判をするから | 56 | 12.4 | 16 | 16.9 | 13 | 13.0 | 109 | 17.6 | 19 | 17.3 | 15 | 12.0 |
| ルールを良く知っていて判定が正しいから | 25 | 5.5 | 6 | 6.3 | 6 | 6.0 | 37 | 5.9 | 7 | 6.4 | 9 | 7.1 |
| 終始真面目に熱心に審判してくれるから | 40 | 8.9 | 4 | 4.2 | 12 | 12.0 | 65 | 10.4 | 11 | 10.0 | 15 | 12.0 |
| | 450 | 100 | 95 | 100 | 100 | 100 | 622 | 100 | 110 | 100 | 126 | 100 |

第5表 審判員によって非常に感じが悪かった理由

| | 男子選手 | | 男子上位 チーム選 手 | | 男子下位 チーム選 手 | | 女子選手 | | 女子上位 チーム選 手 | | 女子下位 チーム選 手 | |
|---|------|------|-------------------|------|-------------------|------|------|------|-------------------|------|-------------------|------|
| | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % | f | % |
| 副審や線審の意見を聞かずに 一人勝手に判定するから | 29 | 6.5 | 10 | 10.5 | 7 | 7.0 | 42 | 6.8 | 8 | 7.3 | 8 | 6.4 |
| 真面目に熱心に審判をしてく れないから | 19 | 4.2 | 2 | 2.1 | 3 | 3.0 | 11 | 1.8 | 2 | 1.8 | 3 | 2.4 |
| どうもんな態度をとってえら そうにしているから | 38 | 8.5 | 9 | 9.5 | 6 | 6.0 | 48 | 7.7 | 4 | 3.6 | 18 | 14.3 |
| ルールを良く知らないで間違 った判定をするから | 45 | 10.0 | 10 | 10.5 | 11 | 11.0 | 78 | 12.5 | 8 | 7.3 | 16 | 12.7 |
| そのチームや監督を知ってい るのでひいきして不公平な審 判をするから | 86 | 19.1 | 20 | 21.0 | 17 | 17.0 | 129 | 20.9 | 30 | 27.3 | 22 | 17.5 |
| 審判に自信がなく判定が優柔 不断でたよりないから | 58 | 12.9 | 11 | 11.6 | 14 | 14.0 | 80 | 12.9 | 19 | 17.3 | 14 | 11.1 |
| 選手、監督や観衆の言動に左 右されて感情的な審判をする から | 49 | 10.9 | 11 | 11.6 | 10 | 10.0 | 73 | 11.7 | 13 | 11.8 | 17 | 13.5 |
| 審判の声や動作(サイン・ジ ェスチャー・吹笛)があいま いではっきりしないから | 37 | 8.2 | 6 | 6.3 | 8 | 8.0 | 67 | 10.8 | 6 | 5.5 | 13 | 10.3 |
| 判断が不正確でミスジャッジ が多いから | 69 | 15.3 | 13 | 13.7 | 18 | 18.0 | 73 | 11.7 | 16 | 14.5 | 8 | 6.4 |
| 試合中不必要なタイムをとっ たりして試合運営がへただか ら | 20 | 4.4 | 3 | 3.2 | 6 | 6.0 | 21 | 3.4 | 4 | 3.6 | 7 | 5.4 |
| | 450 | 100 | 95 | 100 | 100 | 100 | 622 | 100 | 110 | 100 | 126 | 100 |

「どんな場合も公平である」、「感情的にならない」が上位に選ばれ、男女共ほぼ同傾向を示している。

男子ランキング別にみると、上下位とも「感情的にならない」、「一人勝手でない」、「公平である」、「審判の声や動作が明確」の項目が多いが、下位群が上位群に比して、「試合運営が上手」、「判断が正確でミスジャッジがない」など審判技術的な理由が少ないのは、審判についての関心が上位チームより低いことを示し、又逆に「真面目に熱心に審判をしてくれる」の理由が上位群より多いのは、審判技術よりむしろ審判員の態度を問題にしている下位チームの特性を表わしているものと考えられる。

なお女子ランキング別にみると、上位群は「公平である」、「感情的にならない」などが多く、下位群は「感情的にならない」の理由が多く、上位群に比べてより分散的であり、広域に浅く並列している。

下位群が、「感情的にならない」の項目に高い反応を示しているのは、男子の下位チームの場合と同様であり、審判技術よりも審判態度に重点をおく下位群の特性を示しているものと考えられる。

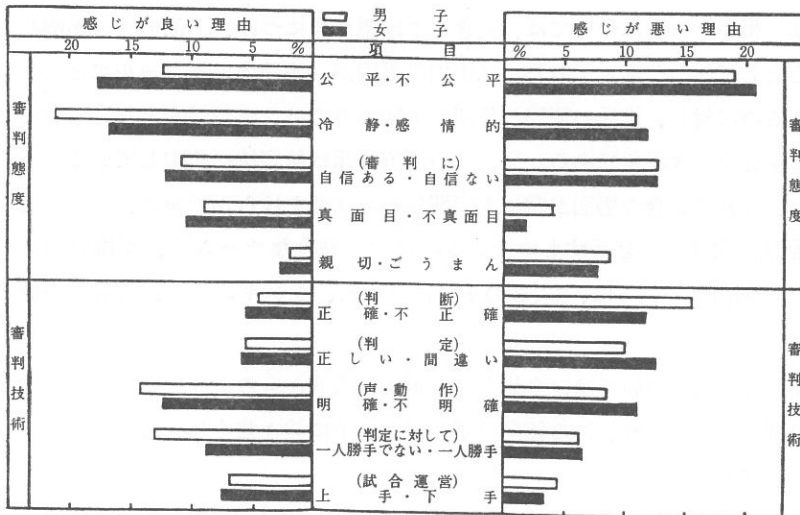
(2) 第5表は、＜感じが悪かった審判＞を、男女及び男女上下位別に表示したものである。男子の理由としては、「不公平」、「ミスジャッジが多い」、「審判に自信がない」が多く選ばれ、女子では「不公平」、「審判に自信がない」、「感情的」、「ルールを知らず間違っ判定する」の理由が多い。

男子ランキング別では、ほぼ同じ傾向を示し「不公平」、「ミスジャッジ」に集中している。

女子ランキング別にみると、上位群は「不公平」の理由に集中しているのくらべて、下位群は分散的であり並列的である。又「ミスジャッジが多い」、「ごうまんな態度」の理由で、上下位の顕著な差異が認められるのは、その特性によるものと思われる。

総括的にみて、① 男女とも「公平」、「不公平」及び「感情的」、「冷静」という審判態度に属する理由が選ばれている。このことは、主観的判断を主とす

第16図 審判態度、技術別「感じのよい理由」「感じの悪い理由」について



るバレーボールの審判が如何に困難であるかを物語るものである。

② 下位群は上位群に比べて、審判技術的な項目よりも審判態度的な項目により強い関心を示している。

③ 女子は男子に比して審判技術よりも審判態度に関心をもっている。
（比較項目については差の検定を行い、危険率1%～3%で有意性が認められた。）

Ⅳ 結 語

以上、スポーツの試合場面としてバレーボールをとりあげ、危機場面としての特殊構造の分析を試みたのであるが、これらの結果を要約すれば、――

(1) 試合が全体として如何に受取られているかについての調査では、ほぼ価値あるものとしてプラスにうけとられている傾向を示してはいるが、マイナスの面にもかなり大きな問題が含まれていることが明らかにされ、男女差、ランキング別にも若干の差が認められた。

(2) 試合場面構成要素としては、相手チーム、審判が大きなウェイトを占めており、特に＜感じの良かった試合＞では相手チームが最上位に、＜感じの悪かった試合＞では審判が第1位にあげられている。

(3) 相手チームについては、良きにつけ悪しきにつけ、上位チームが関心の中心として浮かび上っており、又選択の原因が、集団内のモラルにとどまっているのに対し、排斥の原因が集団対集団の外のモラルが主となっていることは注目すべき現象である。又、この選択排斥は特定校に集中していることが多く、これは試合の場面が常に人間関係的な危機をはらんでおり、いかにその影響力が大きいかを示すものである。なお＜好きなチーム＞、＜嫌いなチーム＞の理由については、2、3の項目に男女差、ランキング差、種目差が認められた。

(4) 審判員については、全体として審判技術的なものよりも審判態度に選手達の関心がよせられ、この傾向は下位群、女子に益々強くなっていることが明らかにされた。

これは、スポーツの試合運営、実施について、教育的立場よりみて種々検討

の必要性を示すものであり、スポーツによる人間形成のためには、このマイナスの外的要因をできるだけ排除・統制することが望ましく、そのためにはチームの監督や選手、応援団の言動も反省自覚されなければならないことは勿論、ルールの改正や審判員の主体性の確立への努力とともに、審判態度、審判技術の向上、特に審判技術修得の方法論的な研究が切望される所以である。

なお、試合場面の研究としては、審判者自身についての研究、人間関係を中心とするチームに関する研究、ゲームの勝敗に及ぼす条件についての実験的研究、個人種目と団体種目との比較研究などをあげられるが、今後の解明にまちたいと思う。

終りに本調査実施に当って、御支援・御協力いただいた奈良県バレーボール協会並びに奈良県下高校バレーボール部の監督、選手諸氏に厚く感謝する次第である。

参 考 文 献

- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| Allport | “A Hand Book of Social Psychology” |
| 松 井 三 雄 | 体 育 心 理 学 |
| 後 藤 岩 男 | 体育の心理、体育心理学要論 |
| Lawther | “Psychology of Coaching” |
| Griffith | “Psychology and Athletics” |
| 小野島 右左雄 | 性格心理学と児童研究 |
| 関 計 夫 | ゲンタルト心理学研究 |
| Norman R.E. Maier | “Principles of Human Relation” |

